

「比較」を通して実践力を育む家庭科授業 ～『暖かい着方の工夫』の実践を通して～

山口大学教育学部附属山口小学校 古庄 又

家庭科では「実践的な態度を養う」ことを目指しています。そのためには学習の中で得た知識や技能を「生活の中で生かしたい」という思いをもつことができるように、自らの生活を見つめ直すことが大切です。しかし、子どもたちはこれまで、自らの生活を当たり前のこととして過ごしてきたため、見つめ直すことは容易ではありません。そこで、授業の中において、子ども自らが「自分の生活と仲間の生活」「これまでの自分の取り組みと活動から得た知識・技能」「学習前と後の自分自身」とを「比較」する場を仕組むと、「おや」「なぜだろう」と自らの生活を客観的に見つめ直すことにつながると考えました。本稿では、比較を大切にした「暖かい着方の工夫」の実践を紹介いたします。

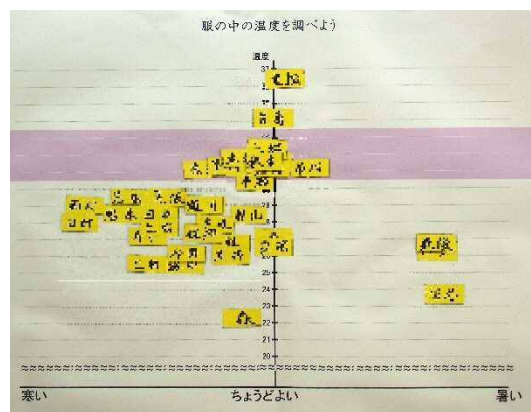
◆ 実践事例「あたたかい着方を工夫しよう」

(1) ねらい

- 暖かい着方の工夫について調べたり、分かったことや考えたことを交流したりしながら、寒い季節に応じた、暖かい着方の工夫を見出すことができるようにする。
- 仲間と共に暖かい着方について交流することによさを感じたり、見出した工夫について家庭や学校で実践しようとしたりすることができるようにする。

(2) 授業の実際

導入では、夏休みに学校に集まった時の写真をもとに、寒い日にどのような着方をすればよいのかを考え、服を持ち寄りました。持ち寄った服を着て、自分が暖かいと感じている温度が何度であるのかを調べ、体感と温度を軸にした表にまとめました(右図)。仲間と



体感と温度を軸にした表(1回目)

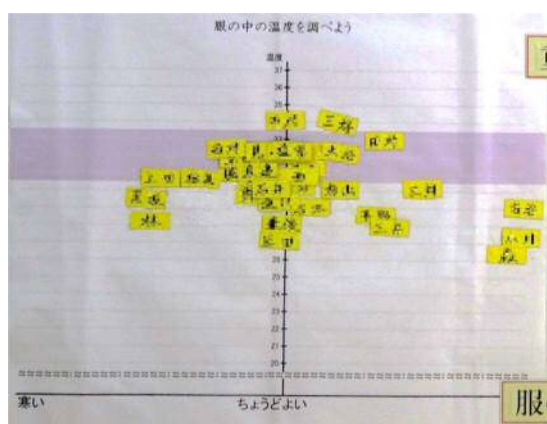
着方について交流する中で「Aさんのように服の形は意識していなかったな」と自分の着方を見つめ直す姿が見られました。また、着方を整理していく中で、子どもたちは「服の枚数」「服の厚さ」「服の形」といった暖かい着方の工夫の視点を見出すことにつながりました。

見出した工夫の視点をもとに、体に見立てた手に布をかぶせ、温度を測る実験に取り組みました。「服の枚数」「服の厚さ」「服の形」といった条件を変え、温度を比較する中で「何枚も重ねた方が暖かい感じがするな。温度を測ると、重ね着の方が3度も高かった」など、感じ方と温度を結びつけながら、見出した工夫が効果的であることに気付くことができました。また、手に布をかぶせて実験を行ったことで「裾を開いていると、中の空気がすうっとする」と子どもたちは服の中の空気の存在に気付き、そのことが「暖かい着方は、中の空気を暖めて逃がさないようにすることだ」という衣服の働きを見出すことにつながったのです。



実験で使った布と温度計

見出したことをもとに、家から服を持ち寄り温度を測る活動を再度仕組み、体感と温度を軸にした表にまとめました。子どもたちは1回目の表と比較し、自分の工夫が効果的であったことに気付きました。取り組んだ工夫についての交流では「僕は今まで首元を意識していなかったから、Bさんのように、ハイネックを着て暖かくしたいと思ったよ」「Cさんのように脱ぎ着しやすい服を羽織るようにしたら、暑い時にすぐに脱げるね」など、自分の着方を見つめ直し、仲間の暖かい着方を自分の着方に取り入れようとする姿が見られました。



体感と温度を軸にした表(2回目)

◆ 成果と課題

仲間と自分自身、活動の結果と自分自身の取り組みとを比較する活動を仕組みたことで、自分の着方を見つめ直し、新たな工夫を見出すことにつながりました。また、その後の自主学習で自分なりの暖かい着方について考えたり、休日の服装を意識する姿が増えたりするなど、自分の暖かい着方に生かす姿が見られました。それは子どもたちが「暖かい着方」について、実感を伴って理解することができたからであると考えます。今後も、子どもたちの実践力を育む家庭科授業づくりを進めていきたいと思ひます。